

常識の形を破る笑い

西山豊

Yusaku Nishiyama 大阪経済大学教授

大阪はあらゆる場において「笑い」が要求される。これは大阪で生きていくための宿命ともいえよう。大学での講義にも笑いやウケが要求され、単調で退屈な講義は嫌われる。新米教員の頃は、ここでジョークを言うと講義ノートに書いていたが、この綿密な計画は一度も成功したためしがない。

でも笑いを諦めたわけではなく、私は日本笑い学会に加入している。その学会は漫才や落語を聞く会ですかとよく聞かれるが、日本お笑い学会ではなく「お」がついていない理由は笑いを真剣に調査、研究する学会であるからだ。研究発表にはベルクソンやアリストテレスなど哲学者の名前が出てくるが、けっして堅苦しい学会でもない。ここには型破りの人たちが集まってくる。医師、弁護士、学者、芸能人、一般市民参加の開放型学会である。学会のあとの懇親会は美川憲一の物まねパフォーマンスがでてくるといふ風変わりなものである。

研究報告の一人、中島英雄は群馬県で医院を開業しているが落語の出来るちよと変わった医師である。なぜ医者をして

いるのですかと聞かれると、落語家では食っていけないからですと答えるという。医者が趣味として落語を嗜んでいるというのとはわかるが、その逆である。落語家が本職で医者はバイトだというのだ。ここには反権威、反権力の思想があるのだろうか。彼は病院の中に病院寄席というのを作っている。病棟ではなく落語部屋だ。笑わないと元氣にならないと患者は退院できないという落ちがついている。

他の一人、福岡県の医師伊藤実喜は、終末期医療にマジックを応用している。聴診器で診察するとき手の中にいつも卵を忍ばせているという。死を待ただけの患者であるが、手の中から卵が出てきて思わずにっこり、つぎの診察は何が出てくるのか楽しみである、と診察自体が喜びに変わるのである。

映画パッチ・アダムスの日本版で、この人は医師なのかマジシャンなのかと一瞬疑わせる。二人とも医療とはこういうもので医者とはこういうものであるという常識を大きく打ち破っている。

笑いは人間の生理作用である。中川米造『笑い泣く性』(玉川大学出版部)は人間の喜怒哀楽を文化生理学として面白くまと

めてある。彼の専門は医学概論であるが教養の幅広さにあらためて感動する。

笑いのひとつの要素として意外性がある。織田正吉の著書『井上宏ほか「笑いの研究」フォー・ユー』から仕入れたとんちクイズを二つ紹介しておこう。

- ①……大鍋に黒豆と白豆をいっしょに入れて煮た。一瞬にして黒豆と白豆を分けることができたという。それはなぜか。
- ②……二〇階建てのビルの窓から男が飛び降りた。しかし男は怪我ひとつしなかったという。それはなぜか。

このクイズが面白いので、私は講義やゼミで学生にレポートを書かせては楽しんでいる。答えは真面目なものが多い。鍋が二層になつていたり、鍋の真ん中に仕切りがしてあったとか、豆の比重の違いを利用したなどの答えが多い。でもそんなことはしていない。普通の大鍋である。実は、黒豆と白豆は一個ずつであったのだ。誰が大鍋に黒豆一個と白豆一個を入れて煮るのだろうか。

もうひとつのクイズは、パラシュートをつけて飛んだとか、ペラペラに飛び降りたとか、二〇階のビルの一九階が地下にもぐっていたとか、二〇階建てのビルであったが二〇階の部屋とは書いていないので一階の部屋から飛び降りたとの答えが多い。しかし、そんなことはなく普通の二〇階建てのビルで二〇階の部屋から飛び降りたのである。実は窓のさんから部屋の内側に飛び降りたのである。誰がそんな危険なことをするのだろうか。

もウソでも不可能でもない。大阪弁というなら、誰がそんなことすんねん、ええかげんにせえ、とでもいうことになろうか。

笑いとはこのように常識の形を打ち破るところから生まれるのではないだろうか。意外性を見つめるには日常の現象をよく観察することであり、笑いを発見する過程は、学問上の新たな知見や芸術上の新技法の発見にもつながるのではないだろうか。

写真はニューヨークやパリなど海外や全国各地の路上を舞台に、津軽三味線にあわせた創作舞踊を披露している大道芸人・ギリヤーク・ニケ崎さんが二〇〇二年五月三日、関西公演をされたとき観客に配られたものである。笑いと異なるが常識の形を破るパフォーマンスでもあった。



2001.6.24 ニューヨーク・ワシントンスクエア

撮 秋好 恩